



子どものつぶやき 私のつぶやき

耳をそばだて 音楽を 聴いてみよう

神原雅之

広島文教女子大学助教授



最近の音楽環境は、私が幼かったころと比べると、とてもよくなっていると思います。テレビやラジオ、カセットやCDなどで、いつでもなんらかの音楽を聴くことができます。デパートや喫茶店などでは、いつでもBGMが流されています。幼稚園や保育園の生活でも、生活のはしほして音楽が聴こえてきます。音楽は以前とは比較にならないほど、私たちの生活のなかに深く浸透しているようです。

このような音楽環境は、よい意味でも悪い意味でも幼児の行動にすり込まれているようです。例えば、最近流行のサッカークのテーマソングを「オーレー、オレ、オレ、オレ」とリズムカルに口ずさみながら踊っている姿は象徴的です。おとながまねをしようと思っても、なかなかたいへんです。しかしその反面で、ふだんは不必要な音もたくさん聴こえていて、私たちの耳と心を侵している。どれもなんとなく聴いて、なんとなく覚えて、そしてなんとなく忘れられていく。このようなよくない習慣も身につけているようです。音楽は何かのついでに、添え物のように聴き流されているように思われるのです。これはふだんの会話や活動にも当てはまります。

このようなことを私が思うのは、最近大勢の子どもと接するなかで、注意力の散漫な子、落ち着きのない子、わがままな子が気になっているからかもしれません。

このような子どもたちは、自由で、心のままに生きている、それが子どもらしいと見なされてしまう。例えば、リズムあそびのときに、音楽に合わせて歩いているのだけれども、なんとなく歩きながら音楽に合わせています。駆け足の音楽が聴こえてくると子どもたちは喜んで走りませんが、そのはやる気持ちを制御できないで、「かけっこ」と化してしまう子の多いこと。そこで「もつと音楽を聴いてみようよ。耳と目と心を凝らして。そうすればもつと音楽がおもしろくなるよ」と声をかけたくなります。が、子どもたちが耳をそばだてなくなるような音楽あそびをとくに提案できないときには、その言葉も躊躇してしまおう。この習慣は、もはやリズムあそびのときだけの問題ではありません。生活のさまざまな場面で、おののの発達段階で可能な方法で、自分の心と体をセルフコントロールしようとする気持ちを醸成することが望まれます。

「環境による教育」が叫ばれるなかで、おとな（援助者）の存在が過小評価されることがあってはなりません。あそびの楽しさだけに終始するのはなく、同時に子どもが今もっている注意力や観察力を駆使しえる環境、ものごとの違いのおもしろさに意識が向けられるような環境の構成や援助の方法はどうしたらよいのか——私たちおとなの役割は、以前にも増して重くなったといえるでしょう。